「十字架にくくりつけられた凧」（マタイによる福音書10：34-42）

今日の福音は、先々週から読んできた「派遣説教」の最後の箇所です。弟子たちが派遣されていく現場、現実はどのようなものだったのでしょうか。マタイによる福音書が記された当時を振り返ってみると、それは大変な状況でした。イスラエルはユダヤ戦争でローマに敗戦し、宗教的・民族的支柱であった神殿が崩壊します。イスラエルの民は苦境の中、ファリサイ派の人々を中心に宗教的基盤を固め、民族の再興を図ります。そのため、民族として「血」へのこだわりを強めて選ばれた民としての誇りを回復しようとし、さらには民族の根幹であった律法を遵守しようとする律法主義的傾向が強まりました。このような現実が背景にあるから、主イエスは今日の箇所で、家族の話しをしているのです。ユダヤ人たちはまさにアブラハムまで遡る家族でした。しかし、当時のユダヤ人の実際の「家族関係」といえば、分断が起こっていたのです。厳格な律法主義がもたらしたものは、律法の文字を守れないなら、お前は神に愛されないと、家族内で裁き合う現実だったからです。家族同士が「お前はふさわしくない」と、互いを神から引き離そうとしている、そういう時代。このような背景の中、「イエスをメシア（救い主）と信じるものは呪われよ」という呪詛の言葉とともに、キリスト教は明確にユダヤ教から異端とされました。これにより、クリスチャンは家族から切り離され、社会的あらゆる権利も失い、迫害が強まりました。これが、弟子たちが派遣されようとしている現場、現実です。今日の箇所は、その弟子たちに向けて強い覚悟を迫るものでもあったと同時に、つるぎを持って主イエスが伴ってくださる、という力強い励ましであったことでしょう。今日の福音で主イエスは、つるぎをもって、たとえそれが同胞、家族であっても、神の愛から引き離そうとする力であるなら、その力から弟子たちを必ず奪い返すことを力強く約束されたのです。神の祝福から引き離そうとする力と、主イエスは徹底的に戦うのです。

当時のユダヤ人たちが求めたことは、純血=Perfect、完全に律法を守ること=PerfectというPerfect主義です。そして、Perfectではない、とされたものは排除され、異端とされました。perfectしか許容されない世界とはなんと恐ろしいことでしょうか。わたしたちの現実を見つめるなら、実はこのPerfect でなければならないという価値観が、わたしたちの現実を支配しているのではないか、と気付かされることが多々あるのです。badとされた人間は失格点を付けられます。あれもダメ、これもダメ。あなたは失格。そうして、当然のように他者のことも裁くようになります。あの人はここがダメ、Perfectではないから。そうしていつの間にか自分も他者も肯定できなくなってしまい、創造の初めから神が祝福してくださっている命であることを見失ってしまうのです。他者との関係のなかで、人はそうやって少しずつ自分を、他者を小さな存在にしてしまいます。家族というのはまさに、この関係の最小単位です。当時のユダヤ人と同じく、わたしたちも家族による裁き合いをしばしばすることがあります。家族というのは、それがないと生きていけないと人に思わせる関係です。子どもにとってそこから見放されることは死に直結します。子どものときに家族から受けた「ダメ」の烙印は大人になってもなかなか消えません。消えたようでも残るのです。何が一番残るか。それは、自分の命は不十分である、という感覚です。ずっと糸で引っ張られるように、その感覚が抜けることはないのです。その糸はハサミで切れるようなものではありません。その糸につながれていると、たとえ愛されていると感じられることがあっても、フラッシュバックのように自分を否定する言葉が蘇ってきて、その人を自己否定の道へと引きずり戻します。

だから、主イエスはつるぎをもたらしてくださるのです。

主イエスはその人を自己否定、命を否定する方へと引きずり込もうとするその糸を、剣を持って断ち切ってくださいます。神は、神に愛されていないと思わせたり、神の愛よりもこっちが大事だぞ、と思わせるものから解放するために、主イエスをこの世に送られました。その主イエスはつるぎをもって、「あなたの命は祝福されていない」というあらゆる関係性からあなたを切り離し、あなたは愛されている、あなたの命は１２０％祝福されたものだと宣言してくださいます。そして、自己を、他者を裁こうとする、否定しようとする強烈な力から解放してくださるのです。「わたしはつるぎをもたらすため来た」とはそういうことなのです。

しかし、今日の箇所を読んでわずかならぬ「恐怖」を主イエスに感じるように、わたしたちはそういう関係性を絶たれることの不安にも同時に襲われてしまうでしょう。どんなにネガティブな関係でも、今ある関係性から引き離されることは恐怖が伴うことです。「わたしたちは主イエスのつるぎによって、糸を切られた凧のようになってしまうのではないか？」という恐怖です。しかしそうではありません。主イエスのつるぎで解放されたものは、今度は十字架にくくりつけられた凧になるのです。十字架とは、わたしたちの命が１２０％祝福されていることの象徴です。なぜなら、人から完全に否定された者が架けられるあの十字架が、復活の象徴になったからです。どんなに人から否定されようとも、神はその人に命を与える。その命を祝福される。そのことの象徴こそが十字架だからです。すべての命が祝福され

ているということのしるし。その十字架にわたしたちはつけられている。「自分の十字架を背負いなさい」とはこのことです。それまでくくりつけられていた、互いを否定し合う関係性から解放され、自分自身の命が祝福されたものであること、あなたの命が１２０％祝福された命であることを宣言されて生きる。これが、自分の十字架を背負って生きるということです。いうなればそれは、恐怖から解放され、安心して自由に飛び回れる凧になる、ということなのです。

主イエスは「平和をもたらすために来たのではない」と言われました。まさにそうです。人間が平和平和と言っているときほど、殺される命があることを忘れてはなりません。平和のため、という号令は大概、国家の平和のため、民族の平和のため、家族の平和のため、という枕詞が付きます。しかし、その枕詞は隠され、平和という大号令のもとに、「平和のためだから仕方がない」と言って、小さくされ、見えなくされる命があるのです。「みんなが一つに団結しよう！」みたいな言い方がされることがしばしばあります。しかし、誤解を恐れずに言えば、みんなが仲良くなることは決していいことばかりではなく、危険な側面があるのです。組織とか集団コミュニティの論理が個人の意思よりも優先される、同調圧力と言うものです。個人が見えなくなる。自分たちの枠外は異端。まさに、マタイによる福音書が書かれたときのユダヤの現実です。「仲良きことは美しきかな」が最善・最優先されるべきことで、その和を乱すものは悪とされ、少しの逸脱も許されない。まさにPerfectが求められる。みんなと同じように振る舞わなければいけない。空気を読んだ発言をしないといけない。空気が読めない他者は排除する。そういうなかで人は、排除の対象にならないように、細い細い道を見つけ出し、自分をドンドン小さくして何とかしてそこを通ろうとする。そうしてようやく生きていける。けれども実際は、存在は小さくされ、いつの間にか自分の命も、他者の命も祝福できなくなる。わたしが、あの人が神に愛されている？そんなわけがない、となってしまう。それが、わたしたちの生きている世界、社会、そして教会も例外ではありません。教会でもそういうことが起こり得ます。人の集まりだからです。そういう関係になる危険が常にあるのです。だから教会はいつも注意しなければなりません。自分たちが存在を小さくする集まりになっていないだろうか。減点方式で自分自身を、他者を採点していないだろうか。

教会は、そうやってこの世界で小さくされた命を迎え、水を差し出すところでなければなりません。主イエスは今日の福音で言っている。

「わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」

教会は給水所です。教会はこの世で小さくされた命を迎え、水を飲ませるところです。細い細い道を何とか息抜き、たどり着いた人に水を差し出す場所です。「よくここまで来た、さあ水を飲んで、一息ついて、あなたの命を回復してください。」そういう場所であり、交わりでなければなりません。

それと同時に、わたしたち自身がいつもこの世で小さくされた存在でありたいと願います。なぜなら、主イエスにまことに従う、神の愛を宣言し、一人ひとりの命を大切にして生きようとするなら、わたしたちはこの世で小さくされるからです。主に派遣される、というのは、自分の命は不十分、祝福されていない、と感じている人のところへ出かけていき、あなたの命は１２０％祝福されていると宣言することです。しかし、この減点方式の世において、まことにわたしたちがすべての人に祝福を告げようとするならば、わたしたちは圧倒的にマイノリティとして生きることになるでしょう。Perfectでなければならないという強い力によって、圧迫され、圧縮され、小さくされてしまうのです。その中でわたしたちは、自分自身を否定することになるかもしれません。いや、もっとも危険なのは、自分の正義を誇示するために、自分を否定する人間につるぎをもたらそうとするかもしれないことです。これではユダヤ人たちと同じ、他者を裁く道へ進むことになってしまいます。だからこそ、派遣される者が決して忘れてはならないのは、つるぎをもたらすのはわたしたちではなく、主イエスなのだ、ということです。自分も他者も裁きたくなる。自らの正義を誇示したくなる。けれども派遣される者は、自分自身のことも、隣人一人ひとりのことも神の祝福で満たされた存在として宣言し続ける使命にひたすら留まることこそが務めなのです。それは非常に厳しい。本当に厳しい。だからこそわたしたちは、神に赦され、こうしてみ言葉によって、この主にある交わりによって、神さまの愛をいただき、養われ続けなければならないのです。水を互いに飲ませ続けなければならないのです。

主イエスがつるぎをもって、神の愛から引き離そうとするあらゆる力から解放してくださる。そのことを信じ、今、この世で愛されていないとされている命のところへ遣わされてまいりましょう。神はすべての命を祝福されています。そのことのしるしである十字架にくくりつけられ、神の愛の風に自由に飛び回る凧として、この世界へと飛び出してまいりましょう。